愛人ジュリエット（1951）

JULIETTE OU LA CLEF DES SONGES
JULIETTE OR THE KEY OF DREAMS

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ロマンス
製作国 フランス
色彩 B&W
時間 93分
初公開日 1952/12/13
公開情報 新外映

【解説】

“詩的リアリズム”の作家カルネの感傷的な幻想ロマンの傑作。詩人プレヴェールとのコンビで知られるカルネだが、この脚本は彼自身の原作に基づき、より作り物めいてはいるが、素晴らしいＧ・フィリップ（クレールの「夜ごとの美女」といい、彼こそ“ビューティフル・ドリーマー”だ）の無垢なる存在感で、映画は純粋な輝きを持つ。

留置所の中でミシェルは夢を見る他ない。彼は一目惚れしたジュリエットに見栄を張って、働いている商店の跡取り息子だと嘘をついた。海へのデートに誘ったはいいが金もなく、つい店の金に手をつけ、投獄の身となったのだ。夢の中で彼は“忘却の国”へ迷いこみ、ジュリエットを探す。人々にその名を告げると一斉にそれぞれの記憶の中のジュリエットをたぐり寄せようと思案に耽ける。身体の不自由な青年は、彼女は死んだと、彼を墓地へ連れて行くが、それもまた勝手な思い込み。そこへ、アコーディオンを弾くことで辛うじて記憶を保つ男（後の監督イヴ・ロベール）が、この記憶喪失者の村のあらましを伝える。ミシェルは暴力刑事に引きずられて行った古城でジュリエットに会うが、森で彼女にねだられ、想い出の品を買いに行った隙に、彼女を領主に奪還されてしまう。彼女はミシェルと会っていた、たった今の記憶も失って馬車に乗った。領主はかつて死刑宣告の身だったことだけを記憶していたが、実は“青ひげ”なのだ。村人と共に彼女を救いに向かうミシェルだが、人々はつい先に目撃した証拠の記憶も瞬時に無くし、領主とジュリエットの結婚を祝福する。懸命にその名を連呼し、彼女の記憶を甦らせようとするミシェル。そして、目が醒めた。釈放だ。雇主（領主と同じ顔）が迎えに来ている。“新妻の頼みとあっては聞かぬわけにいかぬ”という雇主。ミシェルは早速、彼女の元に忍んで真実を訊く。凍りつく表情。そして、裏街を彷徨する彼は“立入禁止”の工事現場の扉を開けた……。アルカンのカメラ、コズマの音楽、トローネルの美術、どれもが芸術の域にある。

【クレジット】

監督	マルセル・カルネ	Marcel Carne
撮影	アンリ・アルカン	Henri Alekan
音楽	ジョセフ・コズマ	Joseph Kosma
出演	ジェラール・フィリップ	Gerard Philipe
	シュザンヌ・クルーティエ	Suzanne Cloutier
	ジャン＝ロジェ・コーシモン	Jean-Roger Caussimon
	ガブリエル・フォンタン	Gabrielle Fontan
	イヴ・ロベール	Yves Robert
	エドゥアール・デルモン	Edouard Delmont

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.